法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

オールコック英公使 : 富士山に登ったヨーロッパ人第一号

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林
(巻 / Volume)
51
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
174
(終了ページ / End Page)
139
(発行年 / Year)
2005-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00021018

富士山に登ったヨーロッパ人第一号

オールコック英公使

宮永孝

いまの時代なら、外国人（西洋人）がわが国にやって来て、日本人社会で暮らしても、なんら問題はないのだが、ほんの百数十年ほどまえの日本では、外国人は攘夷党（二本差しの極右的な国粋主義者）から敵愾心をもって見られていた。開港場や江戸市中には、殺伐とした雰囲気がただよい、外国人は昼夜をとわず、安心して表を歩くことができなかった。

外国人を目の敵とする攘夷党は、息を殺して、かれらの命をつけねらい、ときに外国人に雇われている日本人や清国人などが、とばっちりを食って、犠牲になることも珍しくなかった。

当時、こういった極右的な日本精神をもった人々は、外国人を殺害することによって公憤をもらし、それが国に尽すことになるのだと考えた。この種の日本人は、じつに歪んだ外国人観をもっていたといえる。

本稿は、攘夷熱がもっとも盛んであった時代に、ヨーロッパ人として初めて富士山に登った英公使オールコックが、当時の日本にあたえた波紋や、その後かれが行なった長崎から江戸までの国内旅行が及ぼした影響などについて論じたものである。

*

広東駐箚のイギリス総領事ラザァフォード・オールコック（一八〇九～九七）[1]が、駐日総領事に任命されたのは一八五八年十二月二十一日（安政五・一一・一七）のことであり、同人を乗せたイギリス軍艦「サンプソン」号は、一八五九年五月十七日香港をたち、上

オールコック駐日公使の肖像
『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』より。

海に寄ったのち、同年六月四日（安政六・五・四）長崎に入港した。

同艦はそれから江戸にむかい、最終目的地の江戸湾に到着したのは六月二十六日（五・二六）のことであった。オールコック以下の館員らは、三日後の二十九日（五・二九）に非公式に上陸すると、[2] 高輪の東禅寺（臨済宗妙心寺派、約一万五千坪の境内を有する寺院、現・港区高輪三丁目）を仮公館とした。

一行が公式に上陸し、東禅寺にイギリス国旗ユニオン・ジャックを掲げたのは一八五九年七月六日（安政六・六・七）のことであった。東禅寺に入った者は、オールコックらつぎの八名である。

ラザフォード・オールコック……イギリス総領事兼公使
リチャード・ユースデン……オランダ語の通訳、江戸在勤イギリス副領事代理、箱館副領事代理
アベル・A・J・ガワー……第一補助官（アシスタント）
L・フレッチャー……通訳生
J・マクドナルド……通訳生
フランシス・ハワード・ヴァイス……神奈川のイギリス領事
F・G・マイバーク……長崎のイギリス領事館付オランダ語通訳
岩吉（元漂流民、のち浪士によって刺殺される）……通訳兼ボーイ

なお、フランシス・ハワード・ヴァイス大尉とマイバーク（通訳）についていえば、前者は初代の神奈川領事として青木町の浄滝寺に入り、後者はほどなく長崎に赴任した。

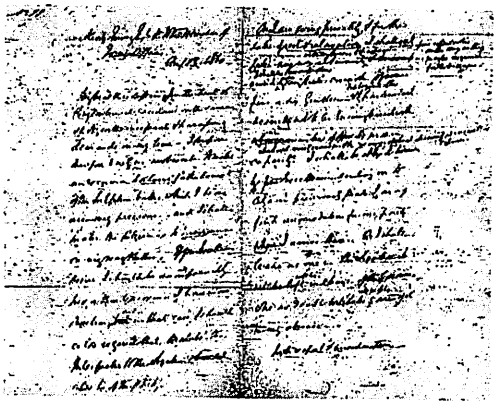
オールコックは、同年十一月特命全権公使に昇進し、翌一八六〇年八月二十五日（万延元・七・九）ようやく将軍家茂の謁見をうけ、[3]

信任状を上呈した。

オールコックは着任後、さまざまな難問を克服するのに忙がしく、精神的圧迫をうけていた。かれは江戸に着任するとき、艦の甲板のうえから仰ぎみた秀麗なる富士山のことが記憶にあり、いつかこの山に登り、その帰りに伊豆・熱海の温泉に浴したいと思っていた。かれにこの決心をさせたものは、富士山そのものに興味があったからであるが、その他の理由として温泉に入って保養したい希望があったこと。さらに日英修好通商条約（一八五八・八・二六、江戸で調印）の第二条にある条項「日本の数港或は諸港に居住のコンシュル（領事）或はコンシュル代弁を任すへし大不列顛の弁理公使並コンシュルゼネラール（総領事）は、故障なく日本国の各部内を旅行すること当然なるへし」[4]といった権利をじっさいに行使してみたかったからである。

また幕府の役人がしばしば口にする、外国との貿易がはじまってから、物価が騰貴し[5]、民衆は困っている、という話は本当かどうか、さらに日本国民は衷心から本当に外国人を毛嫌いしているのかを、この機会にじぶんの目でたしかめる意図もあった。

オールコックは、富士山への遠征、熱海での保養、民情視察を計画すると、その志すところを幕府当局（外国奉行）に伝えた。



オールコックが富士登山や熱海入湯について
幕府に提出した計画書の草稿
[Public Record Office 蔵]

一八六〇年八月二十三日

拝啓

暑さと同じ場所に長期にわたって滞在しているので健康がすぐれず、おまけにしょっちゅう時間をつぶされています。かかる理由から来週早々にでも、硫黄温泉に入湯するために熱海へ出かけるつもりです。硫黄温泉はとても体によい、と聞いております。それから熱海へむかう途中富士山へ旅したいと思っています。

もし閣下が役人を二、三名同行させたい、とお思いでしたら、当方に異存はありません。が、その場合には、公使館付の通訳マタベをわれわれの一行に加えていただきたい。

私的な旅であり、休養をとり気晴らしするのが目的ですから、馬や荷をまかせられるいつもの召使いを連れて行くつもりですし、荷物を運んでもらう必要から、旅の途中で人夫をとくべ

つに雇う予定です。

わたしの一行に紳士が五、六名同行いたしますが、これ以外にいかなる資格があろうとも、大勢の役人に随行され、旅のじゃまをして欲しくありません。役人は足手まといになるだけですし、費用がかさむばかりか、不快の大きな原因ともなりうるからです。

熱海に着いたとき、わが一行のための宿泊所がみつかるよう、閣下から熱海のほうにあらかじめ連絡していただけるとありがたく思います。公使館は空になるので、役人の監理にゆだねるつもりです。かれらはきっとわたしがいなくても、きちんと一切の世話をしてくれるでしょう。

敬具[6]

オールコックが富士登山の帰りに熱海に寄りたかったには、もうひとつ別の理由があったようだ。当時、イギリス公使館付の士官にガールという者がおり、その者は病んでいたので、「二週間熱海に赴き、その地の鉱水を用い[7]」たい希望をもっていたからである。ただし、同人が同行したかどうか定かでない。

閣老らは、登山をするには時期がおそすぎる、登山は公使の品格に差し障りがある[8]、内地旅行は危険であり道中の警護もむずかしい、旅宿の用意に差しつかえがある、などといって、思いとどまらせようとした。

たしかにこのころ、攘夷論が沸とうし、浪士らによる外国人に対するテロ行為が多発していた。安政六年七月二十七日（一八五九・八・二五）の夜八時ごろ、来日中のムラビエフ・アムールスキー伯のロシア艦隊に属するアスコルド号の乗組員、士官、水夫ら四名が食料品購入のため横浜に上陸したとき、イワン・ソコロフ（水夫）とロマン・モフェト（士官）が何者かに斬殺された。

同年十月十一日（一八五九・一一・一三）の夕方には、神奈川駐在フランス領事代理ホセ・ロウレイロの清国人召使いが、横浜弁天通りで二人の武士に斬られ、重傷を負ったのち死亡した。翌安政七年正月七日（一八六〇・一・二九）には、イギリス公使館付の通弁伝吉（紀州加茂郡塩津村生まれ、元漂流民）が公使館の旗竿のところで、深編笠をかぶった武士から背中に短刀を突き刺され絶命した。

イギリス臣民伝吉の死から、一カ月も経たぬのに、またもや横浜で動機不明のテロが起った。安政七年二月五日（一八六〇・二・二六）の夜七時ごろ、横浜本町四丁目と五丁目のあいだで、オランダのブリッグ船クリスティアン・ルイ号の船長ウェセル・ド・フォス

（四十二歳）とスクーネル船ヘンリエット・ルイサ号の船長ナニング・デッカー（四十歳）の二人は、買物中に背後からずたずたに斬られて死亡した。

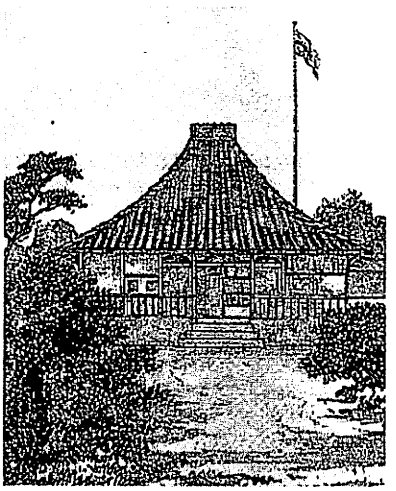
さらに万延元年閏三月三日（一八六〇・四・二三）には、大老・井伊直弼が水戸や薩摩の浪士らに襲撃され、刺殺されるといった事件があり、形勢はひじょうに不穏であった。

このような社会情勢にあって、幕府は外国人が国内旅行をして、人心を刺戟することをいちばん憂えた。何よりもこの時代には、身分の高い者はけっして富士山に登るようなことをしなかったから、当局はいい顔をしなかった。

一八六〇年九月四日（万延元・閏七月十九日）、八名のイギリス人から成る一行は、指定集合地の神奈川のイギリス領事館（青木町の浄滝寺）を出発した。このとき参加したメンバーは、

R・オールコック……イギリス公使
リチャード・ユースデン……オランダ語の通訳、箱館副領事代理
アベル・A・J・ガワー……第一補助官（アシスタント）
L・フレッチャー……通訳生
J・マクドナルド……通訳生
ロビンソン……イギリス・インド艦隊所属の海軍大尉
ヴィーチ……チェルシー［首都自治区］の有名な養樹係の息子。植物学者。
エドワード・バーリングトン・デ・フォンブランク(9)……華北で用いる軍馬を数千頭買いつけるために来日したイギリスの陸軍士官。

などであったと考えられる。



神奈川のイギリス領事館（青木町・浄滝寺）の図
E. B. de Fonblanque : *Niphon and Peche-li or, Two Years in Japan and Northern China*（1863）より。

オールコックは仰々しい供人のない、私的な旅行にしたかったのであるが、

幕府が用意したのは護衛兵、人夫などを加えると、百名ちかい人数であった。同行した士官フォンブランクは、『日本および北直隷（ペイチリイ）、または日本および華北における二年間』[10]（一八六三年）の中で、同行者と行列の模様について、つぎのように語っている。

一行は、イギリス公使館の館員ユースデン、ガーワーおよびマクドナルドの諸氏に加えて、イギリス・インド艦隊のロビンソン大尉、S・ガーワ、植物学者のヴィーチ、そしてわたしから成っていた。

江戸の副奉行が一名、公使館付の通訳マタベ、役人数名がわれわれの護衛をつとめたほか、駕籠かつぎ、別当、日雇い人夫、召使い、従者、駄馬の一隊などが加わり、行列（コルテージ）はちょっとした侵入軍ほどの大きさにまでふくらんだ。

オールコック氏は、しかたなく日本政府に道中（アンルート）の快適さと安全を手配するよう依頼したが、なるべく役人にじゃまされないよう要求を出していた。快適な旅をしたいと思っていたからである。

だから、日本の高官が従者にかこまれて行なう旅ほど豪奢なものはなく、乗物によって運ばれる代わりに、乗物は今回のような場合、日本の紳士が用いる唯一の乗り物であるが、われわれは快適さを得るために威厳を犠牲にしてまでも、馬に乗って行くことにした。

日本人は騎行に驚いたかも知れないが、われわれの精神や肉体は、大いに解放された。

案の上、今回くわだてられた聖地もうでに、日本人は大いに興味をもったようだ。神奈川の通りに群がり、われわれの出発を見送ったとき、われわれの無謀を賞賛すべきか、それともわれわれのずうずうしさに驚嘆すべきか、途方に暮れているようだった。

老人の中には、不吉なことが起るとばかり、頭（かぶり）を振り、神々を冒瀆すれば、われわれ日本人ばかりか、この国にろくなことが起きない、ときっぱりいう者もいた。

しかし、おおかたの日本人は、ただおもしろがるだけだった。かれらはこのところ、びっくりするような出来事を見たり、聞いたりする機会に恵まれていなかったからである。[11]

さてオールコック公使ら八名のイギリス人は、馬の背にまたがり、大勢の護衛に護られながら、神奈川の宿を出発した。同行した幕府側の主なる吏員は、副奉行一名、役人三、四名、目付一名であり、三〇頭以上の馬とともに百名以上からなる長い行列になった。

一行は東海道を下って行ったのだが、いくつも村を通りすぎ、戸塚の宿に着いたとき朝食をとった。その日は藤沢で一泊した。

翌九月五日（万延元・七・二〇）は、相模川[12]の歩渡場（かちわたしば）を渡り、対岸に出ると、海岸に沿って進み、小田原に着くと、藩主大久保侯の家臣の一隊に出迎えられ、旅宿に案内された。道路は、外国人の騎馬行列が来た、というので大勢の見物人でいっぱいであった。

フォンブランクは、オールコック以下のイギリス人のために幕府がとった手くばり、旅宿となった本陣のこと、一般人の出迎えなどの様子をつぎのように伝えている。

日本政府がわれわれを道中（アン・ルート）、宿泊させるために取った手はずは、申し分のないものであった。われわれが休息する所は、前もって決まっており、到着したとき、われわれを迎え入れるためのいっさいの準備が整っていた。

オールコック一行の渡河の図
Sir R. Alcock : *The Capital of the Tycoon* (1863) より。

イギリス公使をありきたりの茶店に寝泊りさせることは芳しくない、との考えから、われわれは大名だけが道中、泊まる宿駅（本陣）を提供されたのである。そのような宿舎はとても清潔であったし、かならず浴室を備えており、湯量も多かった。

オールコック氏は、公人として旅行をしたくはなかったので、当局はどの町でもかれを儀礼的に迎えることはなかった。けれど町に一歩足を踏み入れると、いつもきまって役人の一隊に出迎えられた。かれらは管轄する区域ぎりぎりまでわれわれに同行したのである。

小田原に着いたとき、有力な大名とみなされている同地の藩主が、使者をつかわし、イギリス公使を歓迎し、たのしい旅行を祈ったのである。

民衆のふるまいは、じつに申し分がなかった。かれらにとって、馬に乗った八名のイギリス人の姿は驚きであったにちがいない。それまでにヨーロッパ人を見たことがなかったからである。しかし、かれらは好奇心が旺盛であっても無礼な態度をとらなかったし、われわれを軽蔑する様子はみじんもなかった。

かれらの町や村に入ると（それらはときに長さが三マイルもあり、一本の長い通りから成っているのだが）、老幼男女が家からぞろぞろ出てきて人垣をつくると、われわれの進行を妨げた。けれど長いペティコート（袴）

をはき、麦わら帽子をかぶり、ひもをあごの下で結んでいる、口数の少ない老紳士がいた。

この役人は扇子をもち、われわれの行列の先駆をつとめたのだが、権威の象徴でもあるその扇子をぱたぱたさせると、大勢の群衆はイギリスのやじ馬たちよりもずっとす早くあとずさりした。イギリス人の人だかりの場合、これと似た状況であれば、たとえ護衛兵の一隊に守られていたとしても、リチャード・メイン卿とその軍団の世話になったことであろう。

ましてや群集は、他のやじ馬連のように、われわれのうしろについて来ることもなかった。それどころか、かれらは戸口のところでしゃがんだまま、われわれの姿が見えなくなるまで、じっと見つめていた。

護衛が付いていようが、単独のときであろうが、民衆はわれわれに対して決して粗暴な振舞いとか無礼を働くことはなかった。いわんや旅行中ずっと、物ごいとか酔っ払いとも出会わなかった。[13]

……

江戸から小田原までは四十五マイルほどの距離であるが、われわれが進んだ道は、海岸沿いにある、長崎に至る本街道であった。街道はりっぱなもので、幅が広く、ちゃんと舗装されていて、その両側に大きなヒマラヤスギやライムの木がそびえ、強力な日射しをさえぎり、とてもこちよい木陰を提供していた。

高さが一五〇から一八〇フィートある樹木がそびえる、こういった街道が、何マイルもつづくことは、とても印象的であった。小田原に着いてから、われわれは内陸部に入って行き、箱根の山地を越えはじめた。箱根の山並みは、海岸と富士山の間を南北に延びている。

八時間進んだのち、山の頂上にたどり着いた。われわれは、海抜六千フィートと計算される高台の上にいた。その高台は、鏡のように穏やかな湖水のそばにあった。湖水（芦ノ湖―引用者）の長さは六マイル、幅は一・二五マイルある。この湖（みずうみ）については、不思議な話がある。火山活動によって出来た湖水のようであり、日本人によれば、湖のまん中は、底知れぬほど深く、悪霊が住んでいて、用心しないと引っ張り込まれ危険がたぶんにあるという。

どんなに役人をくどいても、湖水を探検するための小舟を入手できなかったのは、おそらくわれわれを危険な目に遭わせないためであったのだろう。[14]

九月五日（七・二〇）、小田原で一泊した一行は、翌六日三時間ほど歩いたのち、湯元（ユモト）（湯本とも表記する。箱根の玄関口、早川と

須雲川の合流点、箱根七湯のうちの一つ）に到着した。

オールコックによると、当時、湯元は山間の小さな部落にすぎなかった。やがて雲行きが怪しくなり、いまにも雨が降りそうな気配がした。案の定、湯元を立つころどしゃぶりの雨となり、皆ずぶぬれになった。ずぶぬれのまま山を登り、湖畔の関所にさしかかった。そのすぐそばに立派な本陣があった。

この日、元箱根の本陣で一泊した。山間の湖水の景色は、スイスのそれと比較にならなかったが、讃嘆のことばを惜しまなかった。オールコックは湖水と遠くにそびえる富士山をスケッチした。ロビンソン大尉は、寒暖計を煮沸して、湖の海抜の高さを測定したりした。

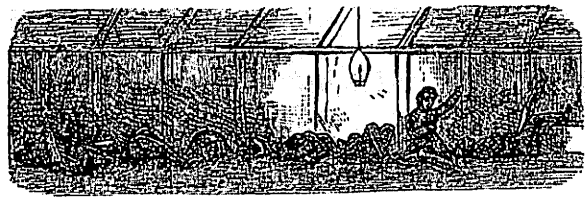
翌九月七日（七・二二）、雨がやんだので三島へむけて出発した。上り坂を進んだり、坂をくだったりした。やがて道ばたの掛け茶屋で休息をとった。こういった茶店では、わずかばかりの現金を払えば、お茶やふかしいも、油であげた魚などを出してくれた。そればかりか季節の果物――赤く熟したブドウ、薄く切ったスイカを口にすることができた。

みな照りつける暑い陽気の中を何時間も歩いたので、のどがかわいており、スイカを何切れも食べた。オールコックはスイカが気に入り、いくつも口にした。かれはその値いの安さにおどろき、いなかの消費物価が急騰した、という政府の説をくつがえす現象を見いだした。

一行は大勢の野次馬たちに出迎えられ、三島（箱根外輪山西麓、大場川流域に位置）に到着した。三島はじつに堂々たる宿場町であり、本陣二、脇本陣三、旅籠屋が七十四軒あった。[15] 小田原と似たところがあった。ここで一泊したのち、翌八日（七・二三）沼津や原（古くは〝原村〟または〝原町〟と称した。東海道の宿駅）を経て、吉原（駿河湾にそそぐ潤井川下流左岸に位置する）に着いた。

この日、大宮（潤井川中流左岸に位置する、富士浅間神社の門前町）の神社から使いの者がきて、明日はわが神社を宿泊所としてほしい、と伝えた。

九月九日（七・二四）、空はからりと晴れ、絶好の秋日和となったので、一行は未明に吉原を発し大宮にむかった。旅の途中で大雨にあい、一行中の大半の者が、油紙のマントや農民が用いるわらのマントを用いた。途中で儀礼と感謝のために神社（大宮浅間社）に寄ったが、ここではひじょうに歓迎された。



オールコック一行の就寝の図
E. B. de Fonblanque : *Niphon and Pe-che-li or, Two Years in Japan and Northern China* (1863) より。

大宮の神社では、諸般の準備がよくととのい、風呂や馬屋が用意されていた。翌十日（七・二五）は天気は上々だったので一行は夜明けとともに起き、村山村[16]（富士山南西麓—富士山の南口登山道に位置）を目ざし、この日はここで一泊した。勇ましい山伏が数名が案内人として雇われた。かれらはイギリス人らの旅行用のもうせんのほか、コーヒー、米、ビスケットなどを運んだ。

一行は穀物が波打つ田畑を通り、森林（カシ、マツ、ブナ）の中に入った。ときどきヒバリが飛び立ってゆくのを目撃した。やがて八幡堂[17]（〝中宮八幡堂〟すなわち〝馬返し〟—江戸時代、馬による登山はここまでしか許されなかったことからこの呼称がある）に着いたので、一同ここで馬をおりた。ここからは人間の恒久的居住地はないのである。

樹木、植物、動物などをみかけない所にさしかかった。目に入るものは、山の粗石（あらいし）、火山灰の固まりなどである。その中に曲りくねった細い山道がある。八幡堂から富士山の頂上まで、十一箇の小屋または洞窟（ほら穴）が二マイルごとにあった。イギリス人らは四時間登りつづけ、日没寸前に休息所の一つに着き同夜そこに泊った。

オールコックらは、巡礼者らが泊まる粗末な仮り宿で、もうせんを敷いて横になると、眠りにつこうとするのだが、寒さと巡礼者たちの置き土産（ノミ）[18]のために、安眠をさまたげられた。夜明けがむしろ救いであった、とオールコックは語っている。

フォンブランクは、この間の様子をつぎのように述べている。

そのつぎの日、Hashi-Mondo（八幡堂）と呼ばれる所まで、六マイルほど進んだ。そこはけわしい上り坂の起点である。われわれは当地で馬を捨て、巡礼者用の笈（おい）（あしつきの箱—引用者）を身につけた。僧侶はそれを一つ一ペニーで売ってくれた。

われわれは旅じたくをすると、でこぼこした、険しい小道を勇ましく昇って行った。われわれの軽い荷物を運んでくれたのは強力（ごうりき）（登山者の荷を背負い、案内する人）である。強力とは、〝とても体力がある人〟のことであり、哀れな人の風貌をしている。かれらは荷役用の動物とし

て生計を立てているのだが、その行為はけっして正当化されることはなかった。

小道を半マイル行くごとに小屋があり、旅人はそこで休息をとったり、怪しげな茶を飲んだりして元気を回復した。六時間かけての登攀ちゅう、われわれは九カ所の休息所で時をすごし、夕やみが迫るころ、さいごの休息所で泊った。われわれはささやかな夕食をとると、疲れた手足をござの上で伸ばし、寒さやノミに悩まされながら眠るしかなかった。(19)

眼下には、海までつづいている丘陵と平野がひろがっていた。夜が明けるのを待って、ふたたび登りはじめた。ジグザグな道を一歩一歩のぼってゆく。第二、第三、第四の休息所と、順番にたどりつく。徐々に登って行くにつれて、空気はいちだんと稀薄になり、同時に呼吸も苦しくなってゆく。

フォンブランクは富士山頂にいたる後半の登攀の困難、山頂や噴火口のようす、雲海の間にみえるパノラマについて、つぎのように記している。

登攀の三分の二以上をおえたが、まだ難所があった。これまで小道は、険しいうえにでこぼこしていたが、足場はまずまずしっかりしていた。けれど残りの道は、あちこちに溶岩や焼石や火山灰がみられ、数ヤード進むたびに、登攀がだんだんむずかしくなって行った。

富士山を昇る図
Sir. R. Alcock : *The Capital of the Tycoon* (1863) より。

妙な話だが、それまで自然の美しさにいささか鈍感であった一行中の何人かは、数分ごとに立ち止まると、景色を愛でるのだが、この連中はいつも地べたに腰を下ろしてから嘆賞した。

けれど空気が薄いことを斟酌する必要がある。空気が稀薄だと、はげしい運動をするのがむずかしいばかりか、呼吸も困難になるのである。

初めは雪をほとんど見かけることはなかったが、登攀をつづけるにつれて、あちこちに雪の大きな固まりを見つけた。そして四時間、山道を苦労してよじ登ったのち、ようやく山頂にたどり着くと、神殿（浅間神社）のそばにあった水おけ（手水

オールコックらが富士山を昇る図
E. B. de Fonblanque : *Niphon and Pe-che-li or, Two Years in Japan and Northern China* (1863) より。

鉢―引用者）は、氷が張りつめていた。

そのときまで、寒さはわれわれの想像を超えたものではなく、昼ごろの日陰の気温はわずか華氏五十四度（摂氏約十三度）であり、沸点は一八六度であった。

富士山の神殿は、そこそこの大きさであり、目立たない、小さな小屋のようなものである。溶岩で作った数体の神像とありふれた安ぴか物の装飾品で飾られていた。敬虔な信者は、山頂にある祭壇にお供えをすると、聖地もうでをやりとげた証拠として、着物に奇妙な模様や図案を彫った木版をその見返りに押してもらうのである。

こういった刻印は御利益（ごりやく）がある。ことに皮膚病の治療にきくのであるが、刻印の数は、着物の大きさやお布施の高によってきまる。

わたしは一分銀（一八ペンスに相当）を与えた。するとそのお返しに、すべての神像（その画像はインチキでないと思うが）と富士山の一切の悪霊の刻印を押してもらった。

じゅうぶんに息を入れてから、われわれは火口の最も高い地点まで登って行った。このときオールコック氏の旗手は、イギリス国旗を広げた。一方、われわれは国旗に敬意を表するため、ピストルを撃った。式典の締めくくりに、女王陛下の健康を祝して、富士山の雪で冷やしたシャンペンを飲んだ。

富士山の噴火口の円周は、海里で約二、三マイル、深さはおよそ六百ヤードある。ロビンソン氏が行なった観測によると、最高峰は海抜一万四千フィート以上もあるという。一般に日本人は、富士山の高さを一万七千フィートとしている。この火山は数世紀このかた活動をすっかり止めているのである。

富士登山を敢行したとき幸い、空は澄み渡り、陽光がさんさんと注いでいた。

眼下や四方に視線をやると、みごとに彩色した地図のような、日本のきれいな陸地が目に入ってきた。たとえば、青い海にくっきりと突き出ている岬（みさき）、見渡す限り島に全身を伸ばしている山並み、青々とした谷を曲がりくねって流れ、しだいに大きくなり、ついに海に注ぎ、姿を消してしまう川などが。

そのような景色を一つ見ただけでも、われわれの苦労は十倍も報いられたことであろう。日本人よ、美しい富士山を誇りに思うがよい！[20]

オールコックらは山頂で、九月十日から十一日まで（七・二五〜二六）二晩泊った。さいごの日の朝、下山するときになって、スコットランド風の濃霧が立ちこめてきた。のちに霧は、どしゃ降りの雨に変わった。

富士山頂に登りつめたオールコックらの行動はある程度明らかであるが、それに関する日本側の記録となると、意外にすくないのである。しかし、『嘉永明治年間録』に、本宮の大宮司が寺社奉行所に出した届書（イギリス人が富士山に登ったこと）が残っており、これによってオールコックらの行程が一部明らかになる。

比日（万延元年八月二十二日）寺社奉行松平伯耆守へ富士大宮司届書写

英国人不二山登山　去る七月十八日出立　廿三日大宮泊の先触に候処　廿二日大雨にて廿四日昼立　大宮小休　村山泊に相成り　廿五日快晴致し　不二山六合目へ泊り　廿六日快晴頂上いたし　其日不二山の木戸迄下り　廿七日同処昼休に相成り　無滞登山相済申候間比段不二取敢御届申上候　以上

不二山大宮不二本宮浅間大宮司不二亦八郎[21]

宮司の報告通りであるとすると、オールコック一行が富士山頂に到達したのは、万延元年七月二十六日（一八六〇・九・一〇）のことである。

一行は富士山の六合目から頂上まで約八時間かかったようであるが、下山するときは早く、三時間もあれば十分であったという。[22]その〝下り〟やその後のオールコックの熱海行について、フォンブランクはつぎのように記している。

下りはいくぶん楽であった。もちろん、だれもが少なくとも一度は、「冥界への下降は容易である」（ローマの詩人ウェルギリウス［七〇〜

一九B・C」作の叙事詩「アイネーイス」に出てくる言葉―引用者）を口にした。

われわれはできることなら、新しい、ちゃんとした道を通って家路につきたいと思っていたが、ついに九月一五日（万延元年八月一日）熱海に到着した。熱海は海岸にある絵のように美しい村落である。硫黄泉が出ることでその名が知られている。

わたしは当地から海路、神奈川にもどったが、オールコック氏とその一行は熱海で入湯した。[23]

明治15年ごろの熱海のパノラマ図
『熱海錦蘋』（明治30・8）より。

富士山頂で二泊したオールコックらは、大宮口に下山し、大宮の本陣で一泊したのち九月十三日（七・二八）の朝、雨の中を出発し、吉原宿（駿河湾にそそぐ潤井川下流左岸に位置、本陣は長谷川八郎兵衛、[24]地名のおこりは〝葭の生えた原〟に由来する）[25]をへて原の宿（沼川上・中流域に位置、沼津の宿から西方へ約六キロ）にいたり、ここで昼食と休息をとった。

午後五時、一行は馬にまたがり原の宿を出発すると、ふたたび三島へとむかった。砂地の並木道をとおり沼津に至り、さらに行くと大名の家臣らに出迎えられた。三島に着いたとき夜になっており、町役人らはちょうちんをもって一行を迎えた。同夜、三島の本陣で一泊した。

翌十四日（万延元年閏七月二十九日）は好天にめぐまれた。一行は早朝、馬にのって出発し、三島と海岸とをへだてている伊豆半島を横断して進んだ。広い谷間をぬけ、肥沃な土地を通って進んだ。ときどき森や丘陵のふところにいだかれた農家や村などが目に入った。

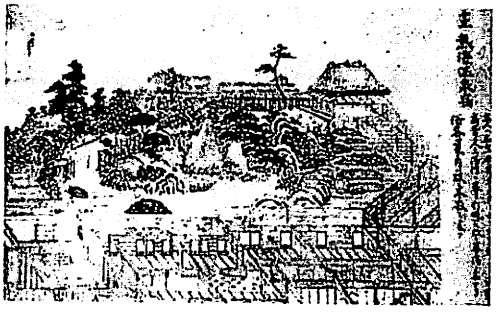
韮山（静岡県東部）の代官・江川太郎左衛門の屋敷で歓迎をうけたのち、さらに旅をつづけた。木のしげった丘、段々になった山などの眺めはすばらしいものであった。突然、山のまん中に戸数百ほどの村に至ったとき、村役人らが出てきて、休息するようにいった。が、そのまま進んだ。道ばたの小山や丘の上には、敷き物のうえにすわっている農民の姿を見かけたが、それは外国人を一目見ようとやって来た野次馬であった。

昼ごろ、海岸のそばの谷間に横たわる小さな町―熱海（当時の人口は約一四〇〇人）がみえた。その町の数カ所から白い蒸気がたくさん吹き出ていた。半マイルほど行くと、オールコック一行を護衛するために待機していた役人たちと出会い、〝主要な浴場施設〟（本陣・今井半太夫の宿）に案内された。

そこはイギリス人らが予想していたものよりずっとすぐれた設備がそなわった宿であった。源泉からじかに引いた浴室が六つあり、日本式庭園に面してかなり大きな部屋があった。さらに海の景色を見渡せる展望台のような二階屋があった。

オールコックは客間に通されると、携帯用の安楽イス、折りたたみ式のテーブル、椅子二、三脚などを入れ、ベッドを急造した。かれは熱海の空気と鉱泉がどれほど体によいかためしてみようと思った。

〝あたみ〟の名称は、[26]東鑑（吾妻鏡とも記す。鎌倉時代の史書［武家の記録］）の建保元年（一二一三）十二月のくだりに「伊豆国、阿多美郷」とあるのに起因するようである。温泉の来歴は、仁賢天皇（第二十四代天皇、名は大脚）の四年、蚊島穂允君の屍を熱海の海に沈めたとき、海中から熱湯が湧き出たことに発している。



オールコックらイギリス人が泊った本陣・今井半太夫宅の図。
『義人釜鳴屋平七とオルコック愛犬物語』［非売品］（昭和37・7）より。

また天平勝宝元年（七四九年）に箱根山金剛王院の万巻上人が、海中に湧く熱湯のために死ぬ魚貝類をあわれみ、その泉脈をたずね、これを山腹に移したのが〝大湯〟とされている。

オールコックは熱海に着いた翌日、外国局の老中に宛ててその旨を伝え、さらに道中各所において受けた厚遇について報じ、関係者に礼をのべてほしいといっている。

一八六〇年九月十六日（万延元年八月二日）　熱海にて

外国事務宰相台下（貴人―引用者）に呈す

熱海に来着し、我旅行の第一の志願を達したれは、道中何処にても、人々によって、格別厚く待遇せられしを、取敢す、台下に深く謝せんとす　○休息所（本陣）毎ニ、余及ひ他の附属士官の為の要用

の家屋、且総て我等需要之物件を備へて、其周旋実に至らさるなし、余深く台下に謝し、且大に台下の周旋を蒙りたる由を、速に吾政府に報告すへきの真正なることハ、台下も必ず必信し給んと思へり　○　此旅行を以て、余も既に健康に復し、且余か筆写し得るよりも富饒（富んで豊か）にして明媚なる地（山水の景色がすぐれた所）を旅行せしを以て、満足せり、殊に各処の賤民ハ安穏幸福にして、正実礼義あること明白なり

此旅行に於て、余を厚く待遇し、且敬礼せる各地の領主に（其姓名ハ次に挙く）、我か謝辞を台下より伝報し給ハヽ、大なる恩恵なるへし、又大宮及ひ村山の僧長（神官）を支配せる日本寺社奉行に、謝辞を同様に伝へ給ふべし、且僧長ハ、余に、甚だ便宜を得せしめたれハなり、又富士山に趣き、夫より此地熱海へ来る途中、通行せし市府の長官へも同様に伝へ給わんことを希ふ

小田原領主　　大久保加賀守
沼津領主　　水野出羽守
富士郡領主　　本郷石見守
伊豆領主　　江川太郎左衛門

台下の命を以て、余に附添へるヒセ・ゴウフルネウル副奉行ノ義（ヒセとは、目付・布施孫兵衛のこと―引用者）及ひ其他諸役人、能其職務を奉し、正実に事を取行へり、今此事を台下に告くるハ、甚だ満足の事なり、恐惶敬白

日本在留ハーレ・ブリタニヤ・マーイェステイト特派公使全権ミニストル　　ルーセルホールト・アールコック手記

エル・ユースデン正訳[27]

注・オールコックが英文で書いた礼状を、ユースデンがオランダ語に訳し、それをさらに幕府の訳官がこのような日本文に反訳した。

ついでオールコックは、富士山旅行の際に知りえた芦ノ湖の高さ、富士山の火口の高さ、富士山の高さなどについて江戸に帰ってから、ユースデンをして外国奉行へ報告させている。

第九十七号

一八六〇年十月二十三日（万延元年九月十日）　江戸　貌利太尼使臣館ニ而

外国奉行足下に呈す

余（ユースデン）、謹て御老中の需に応して、足下に左の経験を告述す、但し其経験は、エキセルレンシー、アールコック富士山旅行に方てなせし所なり、恐惶敬白

函根山湖水之高サ、海面より	六千二百五十「フート」
富士山洞口（噴火口）の周縁（円周）の高サ	一萬三千九百七十七フート
富士山の絶頂	一萬四千百七十七フート
洞（噴火口）の幅	千九百九十八フート
洞の長	三千三百四十二フート

江戸在留の貌利太尼亜ワイス・コンシェル（副領事）

エル・ユースデン[28]

注・原文はオランダ語。それを幕府の訳官がこのように和訳した。（　）内の注は引用者による。

ともあれオールコックらは、この温泉町に二週間ちかく滞在したが、居住地として熱海は必ずしも快適なところではなく、生活は単調そのものであったと述べている。

オールコックらが滞在したころの熱海は、人家が二百七十九戸（安政四年＝一八五七年の調べ）ほどの片田舎にすぎなかった。そこへ総数百人余の人間が滞留したから、当時はたいへん物議をかもしたという。

その当時のことを覚えている古老がいた。かれはそのころ十何歳かの子供であった。イギリス人らは毎日、海岸を散歩したという。

中でも〝ミニストル〟（オールコック公使）と呼ばれる人は、赤い筋の入った運動帽のようなものをかぶり、すこし背を前にかがめて歩く、五十年配の背の高い人であったという。[29]

公使館のイギリス人らは、散歩の行き帰りに町家などに立ち寄ると、手つきや口まねによって冗談をいっていたという。当時、熱海には本陣が二軒あり、イギリス人と供の者は分散して滞在していたようである。[30]

やがてお供の役人らも、郷の狭さに飽きてきたので帰ることを望むようになった。熱海を去る日が近づいたころ、オールコックは村の水道について写生し、忍耐力がつきた、九月二十七日[31]（万延元年八月十三日）の朝、ついに江戸への帰途についた。

オールコックは熱海の風物にそれほど深い関心を示さなかった。しかし、農漁民のくらしぶりの研究には関心があったようである。この時期とれた魚は、サバ、エイの一種、イセエビ、アワビなどであり、また田畑では米、キビ類、野菜などが栽培されていた。

店も何軒かあり、生活必需品（茶わん、皿、盆、和紙）のみを商っていた。オールコックは熱海の土地保有権、行政、租税などについて情報を得ようとしたがうまくゆかなかった。結局、随員と魚や植物の生態とか、熱海の主要製品である和紙や温泉の効能について研究するにとどめた。

フォンブランクは、熱海に着いてからの消息を伝えているが、知友であるコルヴィル艦長のカミーラ号が熱海で一行と会う手はずになっていたのに姿をみせなかったこと、イギリスの海軍士官で探検家のシェラード・オズボーン（一八二二～七五、一八五九年にエルギン卿とともに来日した）が発表した「富士登山」に関する記事について語っている。

熱海に着いたとき、ここは地球上にこれほどすばらしい所があるかと思えるほどの、海岸の美しい、小さな町であったが、案にたがわずカミーラ号の出迎えを受けなかった。（同艦は消息を絶って五日、九月九日に遭難したものと考えられた）しかし、（インド海軍に属する）イギリス海軍の「ベレニス」号に迎えられ、本国から来た郵便物を受けとったのである。

ひょんなことから、われわれは『週一度（ワンス・ア・ウィーク）』紙の最新号をひろげたとたん、シェラード・オスボーンが「富士山（フジヤマ）への聖地もうで」に関して書いた記事を発見したのである。

もちろん、富士山に登ったことは、われわれが大いに誇りとするところであるが、同氏の無知を哀れんだ。いちどもこの山に登った経験が無いものが、よくもまあ富士登山について記事が書けるものである。それは大衆を欺くことに他ならない。

とは言っても、われわれは〝富士山〟の本当の意味を知らなかったのである。富士山のことを、シェラード・オズボーンをはじめその他の作家たちは（かれらは富士登山の経験はまったくなく、従ってこの山については何も知ってはいないのだが！）、富士山のことを〝比類なき山〟(the matchless mountain) と訳そうとした。

"jama"は、山の意であることを、われわれは知っている。けれど日本人は一人として"fusi"が並ぶ者がない、といった意味であるとは認めないのである。

われわれの一行に加っていた一人は、これとは反対に、こうきっぱりいった。"fusi"とか"fusee"という語の意味は"match-ful"、つまり競争相手が多い、ということであろうといい、火山性のことを暗にほのめかした。

これに反して、もうひとりは（当人は文官試験の合格者であるが）、シェラード・オズボーンの解釈を支持して、"jama"というのは確かに山のことであり、"*Fusi-jama*"というのは、山を見た者はほとんどいない（山が好き者はほとんどいない）の意味ではなかろうかといった。富士山（不二山とも書く―引用者）は匹敵する者がない、比類ないの意である。この問題に対して、まだ納得のゆく説明がなされていないようだ。(32)

熱海を発ったオールコック一行は、小田原へむかって困難な旅をつづけ、同地で一泊し、翌日海岸にそった砂地の並木道を通って藤沢についた。ついで戸塚にいたり、五リーグ（約二十五キロ）の道程を馬で一気にとばして、朝食前に神奈川の宿に着き、今回の旅をおえた。

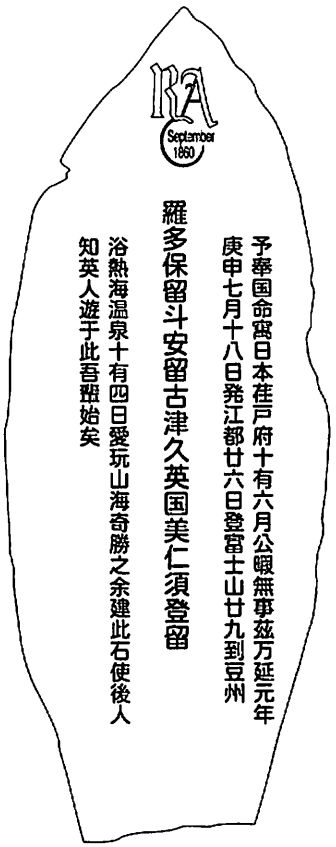
＊

熱海滞在中にオールコックにとって哀しむべき事件がおこった。かれは本国からスコットランド―テリヤ種の愛犬トビーを連れて来ていたのであるが、この犬が間歇泉の熱湯の中で溺死したからである。

そのため本陣の主人にたのんでとむらいをし、木陰の庭に穴を掘り、むしろに包んで葬むり、その上にでこぼこの石を置いて墓石と

した。オールコックは熱海を去るにあたって、本陣の主人にトビーの墓と富士登山と熱海来遊記念の碑を庭内に建ててほしいと懇願した。のち二つの碑は、イギリス軍艦によって熱海に運ばれたが、こんにちそれらを大湯の間歇温泉噴出口のそばに見ることができる。

記念碑は根府川石（小田原産）を用いたもので、碑面の高さが五尺三寸余、幅一尺四寸、厚さ二寸余ある。[33] こんにち漢文体の碑文は読みづらくなっているが、つぎのようなものである。



この漢字の読みくだし文は、つぎのようになる。

《ラタホルトアルコック　エイコク　ミニストル
予国命ヲ奉シ日本荏土府ニ寓ス、十有六月、公暇無事、茲ニ万延元年庚申七月十八日、江戸ヲ発シ、二十六日富士山ニ登リ、廿九日豆州（伊豆国の旧称）ニ到リ熱海温泉ニ浴ス、十有四日、山海奇勝（珍しくすぐれた景色）ヲ愛玩スルノアマリ、此ノ石ヲ建テテ後人ヲシテ英人ノ此ニ遊ブハ吾輩ヨリ始ムルコトヲ知ラシム矣》

愛犬の墓碑の大きさは、高さが二尺三寸余、幅は一尺余りのもので、碑そのものは小ぶりである。碑面に隷書体（ひげ文字）で、

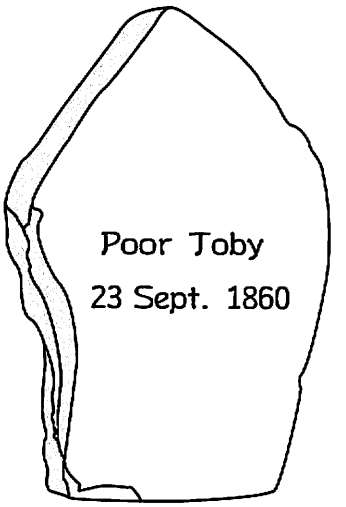
とある。この文字によって、トビーが亡くなったのは一八六〇年九月二十三日（万延元年八月九日）であったことがわかる。

オールコックの熱海生活における最大の出来事は、この愛犬の死であった。そしてこの犬の亡くなったことにより、かれは初めて動物に対する日本人の気持のやさしさを知ったのである。

オールコックが寄せた二つの碑は、熱海の本陣・今井半太夫家の邸内にあったものであるが、その後奇しき運命をたどることになる。今井家のあとを引き継いだのは「熱海館」であった。二つの碑は、しばらく同家が所有していたが、大正七、八年（一九一八、九年）に御料大湯（おおゆ）が没して復旧工事がはじまった際に、熱海館の持主・岡野さだや古屋旅館の先代内田市郎左衛門ら有志の手により、いまある大湯間歇泉の地（熱海市指定文化財史跡大湯間歇泉跡　昭和五十二年四月指定）に移された。[34]

二つの碑は、水害や大地震に遭って流失したり、埋められたりして、一時はその行方がわからなくなったこともあったらしい。それがあるとき偶然植木屋の庭で発見された。戦時中は敵国人の碑ということで、すんでのことで破壊されようとしたが、将来郷土の歴史をかたる重要な資料だと懸命に説得し、かろうじて破壊をまぬがれた。[35]

オールコックの富士登山と熱海来遊記念の碑（左）と愛犬トビーの墓　［筆者撮影］



＊

攘夷熱が沸騰しつつあった当時、オールコックの富士登山や国内旅行は、一般国民からどのように受け取られたのであろうか。そのときの気晴らし旅行は身分を隠した、いわゆる〝お忍びの旅〟ではなかったから、かなり人目を引いたものと思われる。当時、外国方に勤めていた田辺太一（一八三一～一九一五、のち外交官、元老院議員）は、「英国公使のオールコックが富士山に登ったことなども、わが霊山を汚すものとしてこれを憤慨した者もいた」（『幕末外交談』）と述べ、国民的反感があったことを伝えている。

神聖な山[36]が外国人によって汚された、として攘夷党ばかりか信心深い一般庶民の心もいよいよ激したことであろう。なぜなら、富士山は古代より日本人から神聖視され、「日の本の山跡の国の、鎮めともいます神かも、……」（「修訂駿河国新風土記　巻二十四」）に詠われ、室町時代からこの山に対する信仰から農民や町人のあいだで浅間神社詣でがはじまり、夏季、白衣を着、鈴をならし、山に登り祈願した。また江戸時代、富士講（富士山信仰のために組織された団体）が盛んであった。ことに攘夷党の神経を逆撫でしたのは、それだけではない。モース事件（神奈川在住のイギリス商人ミハエル・モースは、万延元年十月十五日（一八六〇・一一・二七）幕府の遊猟発砲を犯したので、神奈川奉行支配向の渥美邦太郎[37]に取り押えられようとした。そのときモースは同人の腕を打ち抜き、のち領事裁判にかけられ国外追放処分をうけた）の損害賠償の件で香港におもむいたオールコックは、文久元年（一八六一）末ごろ長崎に帰着した。

オールコックは軍艦で江戸へもどらず、このときも日英修好通商条約の第二条（国内旅行権）にしたがい、陸路旅するほうを選んだ。オールコックは、オランダ総領事デ・ウィット、長崎駐箚イギリス領事ジョージ・S・モリソン、画家チャールズ・ワーグマンら都合五名のほか、警護の役人をともない、文久元年四月二十三日（六・一）出島を出発した。一行は武雄（佐賀県西部）・小倉と陸行し、下関に着いたとき、海路をとり神戸に出、ここから再び陸路をとり、大坂・奈良・桑名・名古屋・浜松・岡部を経て、長崎を出発して三十二日目についに神奈川のイギリス領事館に到着した。

神奈川では二日滞在し、五月二十七日（七・四）江戸にむかい、同日無事に帰府した。江戸にもどったのは、まったく予想もしなか

った災厄をこうむる前日のことである。

オールコックは、かねてから浪士らから睨まれ評判も悪かったようだ。かれは各国公使らをけしかけ、強硬な決議をおこない、それを幕府に突付けたり、ときに侵略的行為を暗にほのめかし、幕府を恫喝したとされる。憎悪の対象となったその行動の中には、当時の日本人のまゆをひそめさすものもあった。霊山である富士山に登山を試みたり、幕府の制止にも耳を貸さず、長崎からわが物顔に旅をつづけ、道を幾内より東海道にとり、日本国内を視察しながら江戸に帰ったことなどがそれである。

状況をさらに悪化させるかのように、悪いうわさも立った。――オールコック一行は、王城の地（御所）には幕吏にはばまれたために、足を踏み入れることはできなかったが、京見物したうえ、東海道を下った――というもので、この流言はたちまち四方八方に伝わった。

それがいつしか水戸浪士らの耳にも入り、かれらの感情を大いに刺激した。やがて攘夷党は同志を糾合すると、文久元年五月二十八日（一八六一・七・五）の深夜イギリス公使館に乱入した。東禅寺の変の主なる原因は、外夷が内地旅行によって神州の地を汚した、とするものがいちばん有力である。

＊

富士登山やわが物顔の国内旅行が引き金となって、途方もない公使館襲撃事件が起ったのであるが、いま攘夷の釈義、攘夷思想の淵源とその展開、幕末一般人の攘夷思想の特徴などについて述べておこう。

まず「攘夷」の定義であるが、攘とは〝はらう〟とか〝ぬすむ〟の意である。夷とは、えびす（中国の東方民族）のことであり、外国人に対する軽蔑の称である。したがって攘夷とは、ヨーロッパ人（野蛮人）を追い払い、かれらとの交際を絶つことを意味する。

古くは「史記、秦始皇紀」に、〝攘夷〟の語をみる。〝外攘夷狄〟とか〝外攘外夷〟といったものがそれである。また「詩経、車攻序」に、〝内修政事、外攘夷狄〟とある。(38)

むかし、中国人や日本人はじぶんの国のことを誇って〝神国〟とか、〝神州〟と称した。神国という呼称は、古くは『日本書紀』や

『神皇正統記』に見られる。国号（国名）について、前者は「新羅王日、東有二神国一謂二日本一」といい、後者は「大日本者神国也。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝給ふ」[39]と記している。

このような美称は、その後幕末あたりまで、一般に共通した考え方だったかと思われる。平田篤胤（一七七六～一八四三、江戸後期の国学者）は『古道大意』において、「此国（日本）は神国、我らも神孫……」[40]と称し、国粋的な考えを宣伝した。烈公（徳川斉昭、一八〇〇～六〇）は、神の国とはいわず、〝神聖の国〟といっている。「日本は、神聖の国にして、天祖、天孫、統をたれ……」（『告志篇』[41]）と。

このようにわが国の神国思想は、皇統の源である神について語りながら、その神に擁護されている国といった考えに支配されていた。幕末になると、その清らかで、けがれのない国の周辺にしきりに外国の船がやって来るようになり、中には本土に上陸する者も現れた。かくして犯すべからざる国が外国人によって、ふみにじられたのである。ここにおいて、日本人は諸外国から受けた刺激に目覚め、国体を擁護しようといった精神[42]をあらわにした。攘夷論の基因となったものがそれである。

攘夷思想は、幕末になって突如起ったものではなく[43]、古くから存在した。とくに文化四年（一八〇七）にロシア人が利尻島（北海道北西部、日本海にある円形の火山島）に侵入し、翌同五年には長崎においてフェートン号事件（イギリス艦の乗組員が出島のオランダ人に乱暴狼籍はたらく）が起ったことで、国民的自覚が覚醒し、危機感が高まった。

寛政（一七九〇年代）以降、幕府は北方の警備をおこたらず、文化・文政（一八一〇年代）になると、外国船の来航があとをたたなかったので、幕府は文政八年（一八二五）二月、ついに異国船打払令を発令した。けれどこれは見掛け倒しにおわり、じっさい励行できずにおわった。

いずれにしてもロシア、イギリス、アメリカなどの来航侵犯によって、識者や閣老のあいだに国防論が起ったのであるが、基本的には〝攘夷〟をもって国是（国の方針）とし、神君家康の祖法を守るのが務めと考えた（藤田東湖）。徳川斉昭は弘化二年（一八四五）老中阿部正弘に幕府の伝統的政綱（七カ条）を送り、その中で「夷狄（異民族の総称、外国人にたいする誹謗語）を近つくへからさる事」[44]と述べているが、かれの対外観の一端がうかがえる。

国学者の多くは、外国の文物を徹底的に排斥し、本邦神州論（日本魂の興起）を説き、僧侶は仏法を妨げる悪魔の宗教を信じる異人は無用、といった洋夷論を展開した。

徳川幕府の政治の特徴は、国内だけを視野[45]に入れてなされ、あまり諸外国の動向に関心を払うことはなかった。幕末になり、欧米列強の船が日本近海にひんぱんにやって来るようになると、ときにかれらは大砲を撃って日本漁民を驚ろかしたり、また断わりもなくわが国の港に入って来るようになったので、幕府の無策ぶりが露呈され、しかも無定見な対外策によって国内世論は対立混乱し、ついに幕府そのものの瓦解を招いた[46]。

水戸藩は、蝦夷地を警備した経験や自領の海岸線が長いことから、異国船の来航や国家の危機に対してはひじょうに敏感であった。文政七年（一八二四）五月、水戸領多賀郡大津村[47]（現・北茨城市大津町）の沖に捕鯨船三隻が来航し、その中の乗組員十二名（イギリス人）が上陸し、薪水食糧を求める事件が起った。このとき直接異人と会って筆談したのは、水戸藩の学者会沢正志斎（一七八一～一八六三、儒学者藤田幽谷の高弟、のち藩政家、彰考館総裁）であった。

会沢は危機感の中心を北方問題においていたのだが、こともあろうに水戸領内に忽然と異国人が現われたことに驚愕し、改めて外夷の侵入にたいして危機意識をつのらせた。会沢はこの事件を契機として憂国の至情を傾けて、『新論』（上・下の二冊本、藤田幽谷によって藩主徳川斉脩に献上された[48]。安政四年［一八五七］江戸書林玉山堂より刊行）を著した。

会沢正志斎の肖像
『会沢正志斎集　水戸学大系第二巻』（昭和16・2）より。

かれは『新論　上編』（文政八年［一八二五］三月の成稿）の冒頭において、日本の特殊性、現状、地位などについて、つぎのように述べている。

謹んで按ずる（おもう）に、神州は太陽の出づる所（日の本＝日本の美称）、元気の始まる所にして（宇宙に満ちている根本生命、万物を生育させる気）、天日の嗣（天子の子）、世々宸極（帝位）を御し、終古易らず（いつまでも変わらない）、固に大地の元首（万民のかしら）にして万国の綱紀（政治の根幹）なり。

誠に宜しく、宇内を照臨し（世界を照り輝く）、皇化の暨ぶ所（ゆきわたる）、遠邇有る無かるべし（皇室の感化はあまねく行きわたる）。今、西荒蛮夷（西洋人）は脛足の賤を以て（西洋人は脛か足に当る）、四海に奔走（かけめぐる）、諸国を蹂躙し（ふみにじる）、眇視跛履（力のない者が、強いて事をおこなうと禍を招く、たとえ）、敢て上国を凌駕（他をおしのけ、その上に出る）せんと欲す。[49]

会沢の国土観によると、日本は神の国なのである。また日本は太陽が昇る国でもある。この国には陽の気、正大光明の道を生み出す気、万物を生育させる気がある。このような国に万世一系の天皇が君臨している。だから日本は大地の頭首、万国の綱紀（大法）でもある。[50]

これは日本を中心に置いた世界観、神州優越思想にほかならない。

明治維新の実現にもっとも影響力があったのは、水戸藩で興隆した「水戸学」であった。幕末期、明治維新の原動力となった強藩は、いずれも水戸学の洗礼をうけた。[51]

水戸学という名称は、水戸の学者がつけたものではなく、他藩の者が勝手にそのように呼んだにすぎない。水戸人は、これを「天朝正学」（略して「正学」「実学」と呼んだ）。[52] 皇道を主体とした学問であり、皇道学といってもよかった。水戸学が確立したのは文化から天保年間（一八二〇～三〇年代）という。

水戸学をもうすこし布衍すると、その根底にあるのは儒教的な日本中心主義である。すなわち、国学、史学、神道を根幹とする国家意識を統合したものであり、皇国の国体（国家形態）の尊厳を明らかにし、大義名分の精神を固く守り、皇室に奉仕する。中正不偏の日本精神をもって、儒教の長所を採りいれ、ときに西洋文明をも参考にし、政治・経済・教育の革新をなす。忠孝、文武調和、学問と事業は一致たるべきことなどが、水戸学の中心思想であった。[53] その原理をつくったのは会沢の師、儒学者の藤田幽谷であった。

水戸学の中心的人物であった会沢正志斎の『新論』の趣意は、攘夷によって国民の決起をうながし、民心を一つにし、しかるのち日本の伝統的精神にもとづいて、[54] 政治や教育などを一新しようとする切なる叫びであった。換言すれば、国家の非常時に際して、日本国民の覚醒をうながしたものであった。

会沢の『新論』は、大津浜事件が直接の導因となって執筆されたものであるが、その過激なる内容ゆえに、成稿後も三十年ほど印行されなかった。しかし、『新論』の稿本は、門人や有志のあいだで盛んに筆写[55]され、広く読まれたようであり、憂国の士――平野国臣（福岡藩士）、真木保臣（久留米藩）など多くの共鳴者が生まれた。[56]

勅許を経ずして幕府がむすんだ安政五カ国（アメリカ、ロシア、オランダ、イギリス、フランス）条約は、井伊大老が断行したものであるが、幕府の当時のこのやり方に対する非難の中心は、単に井伊の専断にとどまらず、〝外夷の虚喝（こけおどし）〟[57]に屈した幕閣にむけられた。

幕府が列強五カ国と不平等条約を結ばざるをえなかったのは、清国の二の舞を演じたくなかったからである。英仏連合軍が清国軍との戦いに勝った余威を駆って日本にやって来、清国と結んだものと同じ条約を迫る危惧があったからである。これはアメリカ公使のハリスが、かねてより幕府の注意を喚起したところであった。[58]

やがて攘夷党は、攘夷を唱道することはすなわち、朝旨（夷狄撃攘）を遵奉することである、と考えるようになり、「攘夷」のうえに「尊王」をかぶせ、「尊王攘夷」というようになった。

当時の尊攘論者は、幕府の外交処理をなげき憂え、かつ憎悪したのであるが、かれらの怨嗟の声をまとめるとつぎのようになる。

一　幕府は勅許を経ないで、勝手に条約に調印した。このことは朝廷に対する不臣の実を表明したにひとしい。

一　幕府は異人どものこけおどしに屈し、わが国の体面を辱しめた。

一　幕府は水戸に下された密勅を妨げ、多くの有志を死に至らしめた。

一　幕府は外国の使臣を寵遇し、日本の経済的窮乏に顧慮することなく外国の商人に利益をほしいままにさせている。

当時の尊攘党は、江戸で暮らす各国公使らをどのように観ていたかといえば、つぎのように要約できる。

夷狄である外国の使臣どもは、大きな顔をして江戸に来、壮大なる寺院を旅宿（公使館）としている。かれらは国主や大名にも比肩しうる供を率い、閣老と対等の地位にたち、勝手な議論をしてはばかるところがない。閣老や有司は、戦々兢々として使臣らに接し、あまつさえ大和魂をもつ武士も見ならうしまつ。[59]

攘夷論がさかんになるのは大老井伊が暴徒の兇手にかかり横死してからである。このときを境に幕府は凋落の運命をたどった。そして攘夷論の気焔がますます熾んになり、じっさい問題となったのは、文久二年（一八六二）年ごろからという。[60]

一般庶民は、外国人のことを禽獣（きんじゅう）、礼を知らない野蛮人であるとし、かれらはわが神州から富を奪ってゆく者である、と考えた。一方、攘夷党の洋夷観によると、驕慢の夷賊[61]をひとり殺すことは、たとえそれが政府に不利益を与えるとしても、尽忠報国にほかならない、といったもので、かれらは偏狭な西洋人排斥主義に取りつかれていた。[62]

西洋人をじっさい排除するには、小にしては個人的なテロ、大にしては外国と一戦をまじえ、神州の気力（意気）をしめし、しかるのちに和議を整える、といったものが当時行なわれた一種の攘夷説であった。[63] 会沢正志斎の攘夷論は、外国人だからすべてを排斥するというのではなく、列強の侵略的態度[64]を排することにあった。

＊

オールコックは、日本の山嶽信仰のメッカである富士山に登り、帰途静養のために熱海に立ち寄り、国内旅行をしながら江戸に戻るのだが、とくに富士登山は、攘夷党ばかりか一部の富士講のひとびと、また修験者らの神経にさわったことは明らかである。かれらにとって富士山は、「日本之山跡国乃鎮十方座祇可門（ひのもとのやまとのくにのしづめともいますかみかも）」（修訂駿河国新風土記　巻二十四）[65] とあるように、神そのものであったからである。

オールコックらイギリス人が富士山に登った一八六〇年（万延元年）、表口からの登山者（富士講の一団）の数は八六〇〇名にも上った（「神日記」）。この数字は「富士登山史年表」に引用され、また梅本順子の「英国人の異文化理解―オールコックの富士登山と熱海温泉訪問の旅をめぐって」（『国際関係研究』第23号第1号、平成14・7）にも言及されている。

太古の昔から神聖視されていた富士山が異人らによって汚された、として富士山の崇拝者らは激しく憤ったことであろう。

またオールコックの国内旅行（長崎から江戸まで）に、義憤を感じた水戸浪士ら十四名は、ついに公使を誅殺するために決起し、文久元年五月二十四日（一八六一・七・一）水戸領玉造（たまつくり）（茨城県南部、霞ヶ浦に面する町）から船に乗り出帆、東禅寺門前河岸に上陸した。その後、品川の妓楼虎屋にあがり、そこで謀議をこらし、訣別の宴をはったのち、五月二十八日（七・五）の夜半、ついに東禅寺

に討ち入った。

討ち入った者の正確な数は明らかでないが、一説によると十七、八名ともいい、これを迎え討った幕府の警備兵は二百名ほどであった。双方斬りあいになり、総数二十三名もの死傷者がでた。

主謀者・有賀半弥（重信）［二十三歳］は、警備兵と奮闘して死亡するのだが、その懐中の中からつぎのような書簡（文久元年五月付の存意書）が出てきた。

私儀不肖之身ニて御座候得共　神州（日本―引用者）夷狄之為ニ被相汚候を傍観いたし候ニ不忍　此度尊攘之大義ニ基　決心　仕　候　事ニ御座候　匹夫之身（身分の卑しい者）　本より国威を海外に輝候程之儀ニて出来兼候事ニ御座候得共　唯々区々の微衷（わずかな真心）寸分之武威（ほんのわずかな武による威力）相立　国恩之万一ニ　奉　報　度之心底迄ニ罷在候　此儀追々夷狄御退攘之基（外国人を放逐するための基礎）ニも罷成乍恐万一叡慮（天子の考え）台慮（政府？）をも奉　安　候　卑賤之身ニ取　誠ニ以無此上難有仕合奉候間　抛身命決心罷出申候

文久元年五月　　有賀重信[66]

この文章の趣意は、わたしは在野の愚かな人間であるが、わが神州の国日本が夷狄によって汚されるのを座視できない。このたび尊攘の大義にもとづき決起した次第である。もちろん、海外に対して国威を宣揚することはできないが、ほんのわずかな誠心と武力をもって、いささか国恩に報いたいと思った。もしこの一挙が、外国人放逐のきっかけになり、天子をはじめ政府をも安んじ得れば無上のしあわせであり、そのためにもこの身をすてる決心である。

この事件が起ったとき、外国交団は、水戸藩主が浪士らをけしかけて行わせたのではないかと疑った。が、この懐中書の翻訳をよみ、また有賀書簡の中に明記してあった襲撃者十四名の名前を知ると、公使館への夜討は、鎖国の旧習にもとづく事象と理解し、また幕府当局も迅速に下手人の追捕に努めた。

東禅寺の変に接したイギリス政府は、態度を硬化し、清国に派遣されている艦隊の一部を急きょ日本に分遣し、公使館の居留民の保護に当らせ、さらに負傷したイギリス人二名（オリファント［一等書記官］とモリソン［長崎駐箚イギリス領事］）の賠償要求と逃亡犯人の逮捕等をオールコック公使に発令した。

イギリス政府は、賠償金として一万ドルを獲得し、さらに品川の御殿山に幕府の費用で各国公使館を建設する約束を取りつけ、ここにイギリス公使館襲撃事件は一応の解決をみた。

*

幕末期オールコック公使らイギリス人が、信仰の対象である富士山に登ったことの日本社会にあたえた波紋は、どのようなものであったかについては史料が少ないため、まだ詳しい研究はなされていないようである。が、富士登山一つとっても攘夷党や富士山信仰者らを激憤させたにちがいない。

おまけに富士山・熱海への往還、その後の長崎から江戸までの大手を振っての国内旅行など、攘夷党にとって堪えがたいことであったろう。このように外国人の一挙手一投足が、攘夷党のうらみを買ったのであるが、他に経済的理由もかれらの決起をうながした一因ともなっている。

開国後、生糸・茶・海産物などの輸出超過により、国内商品は不足をきたし、物価が急騰した。また金銀の比価――欧米の一対一五にたいして、わが国では一対五であったために莫大な金貨が海外に流出し、市場経済は大混乱した。その悪影響をもろに受けたのは一般大衆や下級武士であり、その結果外国人に対するかれらの排外感情を一層あおり、攘夷運動を激化させる原因ともなった。

当時の志士についての風聞書の中に、この間の事情を述べたものがあり、それには「近年夷人交易御開きに相成、物価次第に高直（高い値段）に相成、士民一同疲弊困窮仕候故、見るに忍びす……」[67]とある。

堅忍持久していた攘夷党は、英狄を誅殺しようとついに蜂起し、イギリス公使館に討入ったのであるが、闖入者の多くは水戸学の洗礼をうけた者であったことは想像にかたくない。攘夷党をこのような行動に駆りたてた原因は一元的ではなく、じつはいろいろな要素

が複雑にからみあっているのである。かれらが尊攘の大義に身命をなげうち、イギリス公使館を襲撃したことは、当時の排他的な民族精神のいちばんの発現――皇国を浄化しようとする行動に外ならなかった。

注

(1) イギリスの外交官。初代駐日イギリス公使。一八〇九年五月ロンドン郊外イーリングで医師の子として生まれ、のちウェストミンスター病院、王立ウェストミンスター眼科病院で医学を修め、一八三二年ロイヤル・カレッジから外科医の医師免状をうけた。

その後、軍医としてポルトガルに赴くが、サン・セバスティアンの攻囲戦において、リウマチ熱に患かり、両手が麻痺したので、外科医の道をすてた。以後外交官となり、一八四四年福州領事、一八四六年上海領事、一八五六年広東領事などを歴任したのち、一八五八年六月初代駐日英公使として来日し、一八六四年まで江戸・高輪の東禅寺に滞在した。

一八六五年から七一年まで中国公使として北京に滞在した。一八七一年帰国し、以降著述活動に従事するかたわら、王立アジア協会、地理学会などの会長を勤めた。一八九七年十一月ロンドンのグレート・クウィーン街で死去。遺骸はサリー州マースタムの聖キャサリン教会の墓地に埋葬された（晩年のオールコックの動向について、現駐英日本公使・竹内春久氏から資料をお送りいただいた。記して謝意を表します）。

(2) 川崎晴朗『幕末の駐日外交官・領事官』（雄松堂出版、昭和六十三年三月）、九九頁。

(3) 「昭徳院殿御実紀」（『第五十巻 続 徳川実紀 第三篇』所収、吉川弘文館、昭和四十一年十二月）、七八五頁。また『嘉永明治年間録』（厳南堂書店、昭和四十三年一月）にも拝謁の記事がある。「九日 英国ミニストル将軍家茂公ヲ柳営ニ拝ス」。

(4) 「校定 不列顕条約幷交易規則」（『開国起原（上巻）』所収、原書房、昭和四十三年一月）、五四七頁。

(5) Sir Rutherford Alcock, K.C.B: *The Capital of the Tycoon; Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, vol I. Longman, Green, Longman, Roberts, & Green, London, 1863. p. 401

同書の邦訳『山口光朔訳 オールコック著 大君の都――幕末日本滞在記――中』（岩波書店、昭和五十二年三月）では、一五三頁。

(6) この史料の原文は、『大日本古文書 幕末外国関係文書之四十一』（東京大学、昭和六十二年一月）の巻末に収めてあるが、幕府の訳官が訳した邦訳は行方不明である。ロンドンの公文書館（Public Record Office）が蔵するマイクロフィルムの請求番号は、F.O. 262, No. 462 で

ある。

Letter from R. Alcock, British Minister, to the Japanese Ministers for Foreign Affairs. Yedo, August 23rd, 1860 No. 88

(7) オールコックが幕府に提出した書簡には、つぎのようにある。

「末九月三日　英国公使より差出候書翰

一　公使館附属士官ガール病気ニ付養生の為二週間之間熱海に赴き其地の鉱水を用ゆへき御許容有度……」(『通信全覧　第二巻』所収、雄松堂書店、昭和五十八年二月)、八五三頁。

(8) Rutherford Alcock: *Narrative of a Journey in the Interior of Japan, Ascent of Fusiyama, and Visit to the Hot Sulphur-Baths of Atami, in 1860*, Journal of the Royal Geographical Society of London, vol. 31 (1861), p. 327

(9) イギリス陸軍の兵站部将校 Edward Barrington de Fonblanque [1821~95] のこと。同人のくわしい経歴については詳らかにしない。一八六〇年一月十日(安政六年十二月十七日)に来日。フォンブランクが与えられた任務は、華北においてイギリス遠征軍が用いる輸送用の馬を三、四千頭買いつけることであった。約十カ月神奈川や江戸でくらしたのち、同年十月末、長崎より中国への帰途につく。

(10) フォンブランクは、のちに日本滞在中の見聞記『日本(ニッポン)および北直隷(ペイチェリー)、または日本および華北における二年間』(*Niphon and Pe-che-li; or, Two Years in Japan and Northern China*. Saunders, Otley, and Co., London, 1863) を著した。

(11) Edward Barrington de Fonblanque: *Niphon and Pe-che-li or, Two Years in Japan and Northern China*. Saunders, Otley, and Co., London, 1863, p. 147~149

本稿において、再び同書に言及するときは、'Niphon and Pe-che-li' と記す。

(12) オールコックは自著 "*The Capital of the Tycoon*, vol. I" 1863 の p. 406 において、この川のことを 'the river *Saki*' と呼び、山口光朔訳『大君の都——幕末日本滞在記——中』(岩波書店)では、「酒匂川」となっている。しかし、これは誤りのようであり、「前後の情景に鑑みて、相模川即ち今日の馬入川と取って誤ないであらう。……記事から想像される位置や渡川の情況等から見て相模川と解するが穏当である」という(高市慶雄「富士登山最初の洋人『ミニストル・オールコック(一)』(『明治文化研究』第四巻・第二号所収)。

(13) *Niphon and Pe-che-li*, p. 159~p. 161

(14) *Niphon and pe-che-li*, p. 149~p. 150

(15) 八幡義生『東海道――安藤広重の『東海道五十三次』と古道と宿駅の変遷』(有峰書店新社、昭和六十二年九月)、九二頁。

(16) 正しくは「村山（村）」という。山口光朔訳『大君の都　中　』では「森山」(一八二頁) になっている。

(17) オールコックは自著 *The Capital of the Tycoon* において、Hakimondo (p. 424) と記しているが、これは八幡堂(ハチマンドウ)の訛音であるらしい。高市慶雄が「富士登山最初の洋人『ミニストル・オールコック(一)』を執筆する際に、富士山研究者・加藤寅之亮に質問状を出したが、その回答がこれである。なお、山口光朔訳『大君の都　中　』では〝八幡堂〟となっている。

(18) オールコックは「巡礼者がのこしていった居住者たち（ノミのこと―引用者）のために熟睡をさまたげられた」という（山口光朔訳『大君の都　中　』、一八六頁）

(19) *Niphon and Pe-che-li*, p. 151～p. 152

(20) *Niphon and Pe-che-li*, p. 153～p. 155

(21) 『嘉永明治年間録　上・下』(厳南堂書店、昭和四十三年一月)、七〇六頁。なお、この史料は官幣大社浅間神社社務所編『富士の歴史』(古今書院、昭和三年十一月)、三六二頁にも引用されている。

(22) 山口光朔訳『大君の都　中　』の一九〇頁。

(23) *Niphon and Pe-che-li*, p. 155～p. 156

(24) 注 (15) の一〇八頁。

(25) 同右。

(26) 『熱海錦嚢』(西原活版所、明治三十年八月)、七頁。

(27) 『大日本古文書　幕末外国関係文書之四十一』(東京大学史料編纂所、昭和六十二年一月)、一三四頁～一三六頁。

(28) 『大日本古文書　幕末外国関係文書之四十二』(東京大学史料編纂所、平成元年三月)、五五頁～五六頁。

(29) 吉田文俊「泰西人最初の富士登山者―英国公使オールコック氏の記念碑及び愛犬の墓碑を訪ふ記」(『東京朝日新聞』大正11・4・24)。

(30) 同右。

(31) 「英国人熱海来遊　一、英国人ミニストル、ユフスデン(ユースデン)、マキドナル(マクドナル)、カアルウィムレン（不詳―引用者）、右ハ万延元年七月廿九日熱海到着、同年八月十三日出立」(「熱海名主代々手控」より。本陣・今井家の当主半太夫が記したもの。熱海市立図書館蔵。森岡美子「オールコ

ックと熱海—今も残る二つの記念碑」(『日本歴史』一九九二年十月号に引用されている。

(32) *Niphon and Pe-che-li*, p. 163〜p. 164

(33) 注(29)におなじ。

(34) 注(29)におなじ。昭和十五年(一九四〇)一月二日、クレーギーイギリス大使はトビーの墓に詣でた(山田兼次『熱海風土記』伊豆新聞社、昭和五十三年九月)。オールコックは外国人として熱海に入湯した最初の人であったと思われるが、慶応二年(一八六六)五月にはフランス公使レオン・ロッシュが、湯治のために綱代の名主・岡本善左衛門宅に滞在し、ついでイタリアの海軍中佐アルミニョンも軍艦マジェンタ号で綱代にやってきた(『熱海市史　資料編』[昭和47・3]、『熱海市史　上巻』[昭和42・5]を参照)。

(35) 平野龍之介『義人釜鳴屋平七とオルコック愛犬物語』[非売品](熱海漁業協同組合、昭和三十七年七月)、四七頁〜四八頁。

(36) 富士山が文献にはじめて現れたのは奈良・平安時代であり、さまざまな名辞が用いられた。たとえば、『常陸風土記』(八世紀初頭の成稿)では〝福慈岳〟、『万葉集』(八世紀後半の成稿)では〝不尽乃高嶺〟、『日本霊異記』(九世紀の成稿)では〝富嵯嶽〟の文字がみられる。〝富士山〟の文字の初見は、『続日本記』(天応元年[七八一])の条にある「富士山下雨灰」とあるのがこれであるという(『富士宮市史　上巻』富士宮市、昭和四十六年十一月、二五一頁〜二五二頁)。

(37) 『横浜市史　第2巻』(横浜市、昭和三十四年三月)、七八三頁。

(38) 諸橋轍次『大漢和辞典　巻五』(大修館書店、昭和三十二年八月)、四四四頁。

(39) 「神皇正統記　巻之一」『正統・読史・山陽史論』所収[非売品](有朋堂書店、大正三年四月)、九頁。『神皇正統記』(岩波書店、昭和五十年十一月)、一五頁を参照。

(40) 井野辺茂雄『新訂　維新前史の研究』(中文館書店、昭和十七年九月)、三五九頁。

(41) 高須芳次郎編『水戸義公・烈公集　水戸学大系第五巻』(井田書店、昭和十六年三月)、一四六頁。

(42) 注(40)の三五八頁。

(43) 藤井甚太郎『明治維新史講話』(雄山閣、大正十五年三月)、四四頁。

(44) 徳重浅吉『維新精神史研究』(立命館出版部、昭和九年五月)、一七四頁〜一七五頁。

(45) 塚本勝義『新論の思想と政策　日本精神叢書　六十五』(文部省教学局、昭和十八年三月)、六頁。

(46) 同右。
(47) 注(45)におなじ。
(48) 今井宇三郎・瀬谷義彦・尾藤正英校注『水戸学』(岩波書店、昭和四十八年四月)の「新論」の解説を参照(四八三頁)。
(49) 高須芳次郎編『会沢正志斎集　水戸学大系第二巻』(井田書店、昭和十六年二月)、二頁。
(50) 注(45)の二三頁〜二四頁を参照。
(51) 高須芳次郎「江戸時代の国民思想」(『講座　第四巻』所収、新潮社、昭和九年三月)、五七頁。
(52) 高須芳次郎「水戸学の日本主義思想」(『日本精神論』所収、東洋書院、昭和九年六月)、二二三頁。
(53) 注(51)の五八頁。
(54) 注(40)の三六五頁。
(55) 注(48)の「解説」(四八四頁)を参照。
(56) 高須芳次郎『水戸学講話』(今日の問題社、昭和十八年四月)、一九一頁。
(57) 田辺太一『幕末外交談　1』(平凡社、昭和五十四年十月)、九五頁。
(58) 福地源一郎『幕府衰亡論』(民友社、明治二十五年十二月)、一二〇頁。
(59) 同右、一二二頁〜一二三頁。
(60) 注(58)の一五八頁。
(61) 〝驕慢の夷賊〟は、写本「攘夷基本論　全」(維新史料引継本、東京大学史料編纂所蔵)に見られる辞句。なお同写本は「皇国ハ天照大御神の御本国　天照大御神の御血紀(ママ)なり　今日に至るまて万世一系の如く紀御し……」「皇国半ハ夷人の地となりて……」という。文久三年七月本居中衛謹記。
(62) 福地源一郎「懐往事談」第六章　外交困難の状況」『懐往事談　新聞紙実歴　幕末政治家』(人物往来社所収、昭和四十三年六月)、四一頁〜四二頁。
(63) 注(57)の二三五頁。
(64) 高須芳次郎『会沢正志斎』(厚生閣、昭和十七年八月)、一二一頁。
(65) 新庄道雄撰『修訂　駿河国新風土記　下巻』(国書刊行会、昭和五十年八月)、八九八頁。

(66) 『江戸　第一巻　幕政編(一)』(立体社、昭和五十五年四月)、四一頁。

(67) 『日本史料集成』(平凡社、昭和三十一年一月)、四八四頁。また『見聞略記――幕末筑前商人の記録』(有限会社海鳥社、平成元年十一月)にも、諸式(物価)があがった記事があり、「只々諸品高直ニ相成リ、当年(万延元年―引用者)ニ至リ、筑後茶抔(など)は殊之外高直、其外……直段、弥高直ニ相成申候」(一〇四頁)とある。